

トーマス・リンリとロンドンのオラトリオ公演

— 《シェイクスピア・オード》 成立に関する一考察 —

松田 聡

Thomas Linley (1756-1778) and the Performances of Oratorios in London

—A Consideration on the Background of the Composition of *Shakespeare Ode*—

MATSUDA, Satoshi

大分大学教育学部研究紀要 第45巻第2号

2024年3月 別刷

Reprinted From

RESEARCH BULLETIN OF THE

FACULTY OF EDUCATION

OITA UNIVERSITY

Vol. 45, No. 2, March 2024

OITA, JAPAN

トーマス・リンリとロンドンのオラトリオ公演 — 《シェイクスピア・オード》 成立に関する一考察 —

松 田 聡*

【要 旨】 本稿では、22歳で早世した18世紀イギリスの作曲家・ヴァイオリン奏者トーマス・リンリ (1756-1778) の代表作《シェイクスピア・オード》(1776年)の成立の背景について、それが初演されたロンドンのドルリー・レーン劇場におけるオラトリオ公演との関わりを観点に考察を行った。ヘンデルが自作を発表するために開始したロンドンの四旬節オラトリオ公演は作曲家の没後、スタンリーとスミスが運営を受け継ぎ、ヘンデル作品を中心とする公演を続けた。そして、スミスが引退した後はリンリの父トーマスが運営に加わり、リンリもヴァイオリン奏者として公演に出演するようになった。その最初の年に《シェイクスピア・オード》は初演されたのであり、まずは、同作品の成立の背景として、そのようにリンリ家が公演に携わることになったことが挙げられる。ただし、その2年前から公演の演目にヘンデル作品以外の新作も入れる傾向が現れていることも見逃せない。これについては、同日程で他の劇場でも行われるようになっていたオラトリオ公演が、新作を中心とするプログラムを組んだのに影響された結果と考えられる。リンリが19歳にして大作《シェイクスピア・オード》をものしたことからは、同い年のモーツァルトと並び称されるほどの彼の早熟の才能をうかがうことができ、従来、その点が注目されてきた。しかし、それだけでなく、この作品は、そのような公演をめぐる状況の変化の中で生み出されていった新作の中で、とくに十分な成果を上げたものとしても位置づけられるのである。

【キーワード】 トーマス・リンリ 《シェイクスピア・オード》 モーツァルト ヘンデル

序

本稿では、トーマス・リンリ (Thomas Linley, 1756-1778) の代表作《シェイクスピアの妖精たちへのオード Ode on the Spirits of Shakespeare》(以下、《シェイクスピア・オード》)(1776年)の成立の背景について、それが初演されたロンドンのドルリー・レーン劇場にお

令和5年10月31日受理

*まつだ・さとし 大分大学教育学部芸術・保健体育教育講座(音楽学)
全九州大学音楽学会, 宮崎, 2019年12月13日(大幅に改稿した)

るオラトリオ公演との関わりを観点として考察する。

イギリスの作曲家・ヴァイオリン奏者リンリは、同じ年に生まれたモーツァルト (Wolfgang Amadeus Mozart, 1756-1791) と同様に、生前、音楽の神童として評判になった人物である。しかし、不慮の事故によって 22 歳の若さで亡くなり、現在では一般に知られざる存在にとどまる。そこで、まず次節において、リンリに関する基本的な説明を行い、さらに節をあらためて、本稿における具体的な問題設定を行うこととする。

I トーマス・リンリについて

1-1 生涯

リンリは 1756 年 5 月 7 日、イングランド南西部のバースで音楽家トーマス・リンリ (Thomas Linley, 1733-1795) の次男として生まれた。父子同名のため、息子の方はトーマス・リンリ・ジュニアと呼ぶことが多いが、本稿では息子を単にリンリと呼び、父親については、トーマス (父) のように、それと分かる仕方而言及する。

リンリは幼少時より音楽の才能を発揮し、まずは父親がその教育を担った。1763 年、7 歳のときには、近隣の都市ブリストルにおける演奏会に出演し、ヴァイオリン演奏や歌を披露している。また、その頃から、演奏会のシーズンオフにロンドンに出て、当時のイギリスを代表する作曲家ボイス (William Boyce, 1711-1779) に、5 年にわたって作曲を師事した。さらに、1768 年、12 歳になるとイタリアに留学し、同国のヴァイオリン奏者の第一人者であったナルディーニ (Pietro Nardini, 1722-1793) の弟子となった。なお、留学中にモーツァルトに会って親交を結んでいるが、これについては後述しよう。

1771 年にイギリスに戻った後、リンリは、まずバースで、さらにはロンドンで作曲とヴァイオリン演奏を中心とする活動を行った (本稿では、その一端をみていくことになる)。しかし、1778 年 8 月 5 日、ミッドランド東部のリンカンシャーにあるグリムズソープ城に滞在中、湖でボートの転覆事故に遭い、22 歳にして世を去った。

1-2 モーツァルトとの交友

リンリの名前は、現在では主に、イタリアにおけるモーツァルトとの交友を通じて知られるところとなっている。リンリより 4 か月早く、1756 年 1 月 27 日にザルツブルクで生まれたモーツァルト²⁾は、周知のごとく、幼いころから演奏旅行を繰り返し、音楽の神童ぶりをヨーロッパ各地に披露してきた。その彼が父レオポルトとともに初めてイタリア旅行に出たのは、1769 年 12 月のことであり、翌 1770 年 3 月 30 日から 4 月 6 日にかけてフィレンツェに滞在した折にリンリと知り合ったのである。

レオポルトが妻に宛てた同年 4 月 21 日付の手紙からは、2 人の少年音楽家がすぐに意気投合し、4 月 3 日から 3 日間、一緒にヴァイオリン演奏をして友情を育んだ様子がうかがえる。また、6 日にモーツァルトがフィレンツェを出発する際に、リンリが別れを惜しみ、市門まで馬車につき添ったというエピソードも手紙につづられている。その後、モーツァルトがイタリアに滞在している間、2 人の間に手紙のやり取りはあったが、再び会うことはなかった。

なお、同じ 1770 年の 9 月には、イギリスの音楽史家バーニー (Charles Burney, 1726-1814) もフィレンツェでリンリと知り合っている。彼は、この年の 6 月から 12 月にかけてフランス

とイタリアを旅行しており、フィレンツェを訪れる前にはボローニャでモーツァルトとも会った。バーニーは彼らについて、帰国後に著した『フランス、イタリアの音楽の現状』(Burney 1771)に、「当代の最も将来性豊かな天才〔the most promising geniusses〕としてイタリア中で話題となっている」(247)と記した。当時、2人の少年音楽家が同じように評判になっていたことを証言する貴重な記録といえよう。

イタリア旅行後、モーツァルトがリンリと連絡を取ることがあったのかどうかは分かっていない。イギリスの友人の早すぎる死については、モーツァルトもいずれ知るところとなったようであり、ウィーンで知り合ったアイルランド出身のテノール歌手マイケル・ケリー (Michael Kelly, 1762-1826) は、『回想録』(Kelly 1826)の中で、作曲家がリンリについて「もし彼が生きていたら、音楽の世界を彩る最も偉大な人物の1人〔one of the greatest ornaments〕となっただろう」(I: 225-226)と語った、と伝えている³⁾。

1-3 作品

リンリの没後、1779年から翌年にかけて筆写譜が作成された8作が、現在に伝えられる彼の主要作といえる⁴⁾。それらのうち、《シェイクスピア・オード》と《モーゼの歌 The Song of Moses》(1777年)の2つのオラトリオ、アンセム《神を立ち上がらせ Let God Arise》(1773年)、及び1曲ずつのヴァイオリン協奏曲とヴァイオリン・ソナタ(いずれも作曲年代不詳)の計5作の筆写譜は、1780年にイギリス国王ジョージ三世に献上された。残りの3作は、《デュエンナ The Duenna》(1775年)と《バグダッドのカーディ The Cady of Bagdad》(1778年)の2つのオペラ、及び劇付随音楽《テンペスト The Tempest》(1777年)である。

また、トーマス(父)が1795年に没した数年後に、リンリ父子の声楽作品の楽譜集がロンドンで出版されており、所収の47曲中、14曲がリンリの作品と推定されている⁵⁾。なお、リンリは、ヴァイオリン協奏曲については20曲程度、また、ヴァイオリン・ソナタも少なくとも7曲を作曲したと伝えられるが⁶⁾、上記の1曲ずつを除いて散逸したものと考えられている。

1-4 現在のリンリ研究

現在、一般には知られざる存在にとどまるとはいえ、22歳まで天才音楽家としてロンドンで活躍をし、少なからぬ作品を残しているリンリについては、これまで基礎的な研究は行われてきた。代表的な研究者としては、グイム・ビーチイとペーター・オーヴァーベックが挙げられよう。ビーチイはリンリについての学位論文(Beechey 1965)や『ニュー・グローヴ音楽事典』の「リンリ家」の項目(Beechey 1980)を執筆したほか、《シェイクスピア・オード》と《神を立ち上がらせ》の批判版(Beechey 1970, 及び1977)の校訂などを行った。また、オーヴァーベックはリンリについての最初の、そして現在のところ唯一の研究書(Overbeck 2000a)を執筆したほか、《モーゼの歌》の批判版(Overbeck 2000b)の校訂を行った。

作品の楽譜の刊行に関しては、今後、前述の劇音楽や器楽曲などの批判版も待たれるところではあるが、このような研究がすでになされているリンリは、1770年代にイギリスで活動した音楽家の中で、最も研究が進んでいる人物の1人とみなすことができる。とはいえ、個別に考察すべき主題は、当然のこと、多く残されている。また、それらの追究により、決して十分な研究がなされているといえない当時のイギリスの音楽全般⁷⁾についても、新たな光を投げかけることが期待される。本稿は、そのような主題の1つを取り上げるものである。

II 問題設定

2-1 本稿の主題と考察の目的

本稿で取り上げる《シェイクスピア・オード》は、フレンチ・ローレンス (French Laurence, 1757-1809)⁸⁾の台本に作曲された2部構成の英語オラトリオである。シェイクスピア (William Shakespeare, 1564-1616)を称える内容から、世俗的オードに分類することができる。エアや合唱曲など全24曲の番号曲から構成され、全曲の演奏に約60分を要する⁹⁾、リンリの作品の中でも最大規模を誇る楽曲となっている¹⁰⁾。

本稿の主題は、冒頭に示したように、この《シェイクスピア・オード》の成立の背景を考察することである。ビーチイは、校訂した批判版の序文で作品に関する基本的な説明を行っており (Beechey 1970: xix-xxii)、オーヴァーベックは、作品の音楽的特徴について考察をしている (Overbeck 2000a: 110-158)ものの、いずれも、成立事情についてはとくに詳述していない。例えば、リンリがローレンスの台本に曲付けすることになった経緯には一切、言及していないのだが、おそらくそれは資料の欠如に起因することであろう。このように、この作品の成立については、そもそも追究に困難が伴うのは否めないが、作品が初演された劇場におけるオラトリオ公演との関わりという観点から、その背景について考察することは可能である。また、それを考察することを通じて、当時のロンドンにおけるオラトリオ公演の実態を、より明確に浮き上がらせることもできるであろう。本稿で試みるのは、そのような考察である。

ビーチイやオーヴァーベックにそのような方向からの考察がなかった一因として、オラトリオ公演についての研究自体が、それほど進んでいなかったという事情が挙げられる。18世紀のロンドンにおける劇場の公演日程は、すでに『ロンドンの舞台』(Stone Jr. 1960-68)から網羅的な情報を得ることができたのだが、とくに1760年代以降のオラトリオ公演については、オーヴァーベックの著作が出された2年後に刊行されたエヴァ・ツェルナーの研究書 (Zöllner 2002)で初めて詳しく論じられた、というのが、この方面での研究の状況である。

本稿では、それら2つの文献を基礎的な資料として、公演のプログラム内容について検討を行い、それと関連付けることによって《シェイクスピア・オード》が成立した背景を探ることとしたい。それにより、1770年代のイギリス音楽の中でこの作品がどのような位置づけにあったのかを明らかにすることが、本稿の目的である。

2-2 ドルリー・レーン劇場における1776年のオラトリオ公演

《シェイクスピア・オード》がロンドンのドルリー・レーン劇場で初演されたのは、1776年3月20日のことである。この年の四旬節は2月21日から4月6日までの46日間だったが¹¹⁾、その期間に行われたオラトリオ公演の中で、19歳のリンリの新作が披露されたのであった。

まず、考察の出発点として、その年の公演の日程とプログラムを表1(次ページ)に示そう (Zöllner 2002: 224に基づく)。四旬節のうち、初日の「灰の水曜日」(2月21日)と最終週の「聖週間」(3月31日～4月6日)以外の水曜日と金曜日ごとに行われた全11回の公演であり、演目のほとんどすべてをヘンデル (Georg Friederich Händel, 1685-1759)の作品が占めている点に、大きな特徴が見出される。そして、その中で唯一、ヘンデル以外の人物の作品として上演されたのが、リンリの《シェイクスピア・オード》である。

表 1 1776 年のドルリー・レーン劇場におけるオラトリオ公演の日程

回数	日付	演目（作曲者：作品名）
1	2/23（金）	ヘンデル：エイシスとガラテア ヘンデル：聖セシリアの日のためのオード
2	2/28（水）	ヘンデル：ユダス・マカベウス
3	3/1（金）	ヘンデル：アレクサンダーの饗宴 ヘンデル：戴冠式アンセム
4	3/6（水）	ヘンデル：イエフタ
5	3/8（金）	ヘンデル：エイシスとガラテア ヘンデル：聖セシリアの日のためのオード
6	3/13（水）	ヘンデル：快活の人、沈思の人 ヘンデル：シャンドス・アンセム
7	3/15（金）	ヘンデル：アレクサンダーの饗宴 ヘンデル：戴冠式アンセム
8	3/20（水）	リンリ：シェイクスピア・オード （演奏会）
9	3/22（金）	ヘンデル：サムソン
10	3/27（水）	ヘンデル：メサイア
11	3/29（金）	ヘンデル：メサイア

演目のほとんどすべてがヘンデル作品であるのは、ロンドンにおける四旬節のオラトリオ公演がそもそも、ヘンデル自身によって開始されたものであることと結びついている。全 11 回という公演日程に固定したのも、作曲家の生前のことである¹²⁾。彼が没した翌年の 1760 年からは、スタンリー（Charles John Stanley, 1712-1786）とスミス（John Christopher Smith, 1712-1795）が公演の運営を受け継ぎ、それまでと同様に、四旬節のシーズンにヘンデルのオラトリオを上演していった。そして、1774 年を最後にスミスが退くと、代わりに 1776 年から、リンリの父トーマスが公演の運営に加わったのであった。

リンリはその 1776 年以降、公演のコンサート・マスターを務めるようになり、また、同じ舞台上でヴァイオリン協奏曲の演奏も行った¹³⁾。さらに、ソプラノ歌手であった 2 人の妹、メアリー（Mary Linley, 1758-1787）とマリア（Maria Linley, 1763-1784）もオラトリオの独唱を担当している。このように、いわば家族ぐるみで公演に深く携わる中、リンリが公演の 1 演目として新作を初演したというのも、自然なことと受け取られよう¹⁴⁾。

しかし、その一方で、ヘンデルから直接に受け継がれた公演において、作曲家の没後 17 年目でなお、彼のオラトリオが演目のほとんどすべてを占めている中、他の作曲家の作品として唯一、上演されたのがリンリの《シェイクスピア・オード》であったという事実は、その演目がこの公演の中では異例なものであったこともうかがわせる。それを検証するために以下、1760 年以降のオラトリオ公演全体を視野に収めて考察を行うこととしたい。

なお、ヘンデルは生前、四旬節のオラトリオ公演をコヴェント・ガーデン劇場で行い、スタンリーらが受け継いだ後も、しばらくそれが続いてきたが、1770 年からドルリー・レーン劇場に会場を移している。また、あとで詳しくみていくが、同時期にロンドンの他の劇場でもオラトリオ公演がなされている。そこで以下、ヘンデルからスタンリーらが受け継いだ公演については便宜上、「スタンリーの公演」と呼ぶことにする。

Ⅲ 1760～70年代のロンドンにおけるオラトリオ公演

3-1 1760～78年のオラトリオ公演における新作の発表状況

まず、ヘンデルの没後、スタンリーの公演においてヘンデル作品以外の楽曲がどの程度、上演されたのかをみることにしよう。対象となる作品は、ヘンデル以外の人物が作曲したオリジナル作品、及びヘンデル等の既存の楽曲を利用してオラトリオに仕立てたパスティッチョである。両者を区別し、ヘンデルが没した翌年の1760年からリンリが公演に関わった最後の年である1778年までの上演状況をまとめたのが表2である（Zölner 2002: 205-226に基づく）。

表2 1760～78年のスタンリーの公演にヘンデル作品以外の上演

年	日付	オリジナル作品	パスティッチョ
1760	2/29	スミス：失楽園〔初演〕	
	3/5	スミス：失楽園	
	3/12	スタンリー：ジミリ〔初演〕	
1761	2/18	スミス：失楽園	
	2/20	スタンリー：ジミリ	
	3/4	スミス：レベッカ〔初演〕	
1763	3/4		ブラウン：サウルの救済〔初演〕
1764	3/16		スミス：ナバル〔初演〕
	3/21		スミス：ナバル
1769	2/10		スミス：ギデオン〔初演〕
	2/15		スミス：ギデオン
1770	3/9		スミス：ギデオン
1774	3/2	スミス：失楽園	
	3/23	スタンリー：エジプトの没落〔初演〕	
	3/25	スタンリー：エジプトの没落	
1775	3/29	スタンリー：エジプトの没落	
1776	3/20	リンリ：シェイクスピア・オード〔初演〕	
1777	3/12	リンリ：モーゼの歌〔初演〕	
1778	3/18	リンリ：モーゼの歌	

オリジナル作品はスミス、スタンリー、リンリ2作ずつの計6作、パスティッチョはブラウン（John Brown, 1715-1766）1作とスミス2作の計3作である。これら、合わせて9作が上演された公演数は19を数える。1760～78年の19年間、全209公演中の1割弱という割合である。ただし、上演頻度には時期により偏りがあり、19公演の約半分の9公演が全期間の4分の1ほどにあたる最初の5年間に位置しており（55公演中9公演、約16パーセント）、残りの10公演がその後の14年間でのものである（154公演10公演、約6.5パーセント）。とくに、その14年間で、1765～73年の9年間では《ギデオン》が3回、上演されたのみであり、ヘンデルのオリジナル作品の上演が約96パーセントを占めるにいたっている。

そのような偏りは、6つのオリジナル作品の発表時期について、より顕著に表れている。すなわち、1760～61年の2年間に3作が発表されたのち、13年の間隔を置いて、1774～77年の4年間に3作が発表されているのである。

以上を時系列に沿ってまとめると、最初の2年間はスミスやスタンリーによる新作も公演に組み込まれたが、その後は、ヘンデル作品以外はパスティッチョだけとなり、1765年以降、1773年までは、ごく例外的にパスティッチョが上演されるのみで、ほぼ完全にヘンデル作品だけからなるプログラムが組まれた。それが変化したのが1774年であり、リンリの新作も、その新たな傾向の中で初演された、となろう。

したがって、《シェイクスピア・オード》は、公演全体の中ではたしかにヘンデル作品以外の演目として異例なものといえるが、2つの点において、それまでの流れに沿ったものとしても捉えられる。1つは運営に関わる人物による作曲である点、もう1つは、1774年以降、毎年、1回は公演に組み込まれてきたヘンデル作品以外のオリジナル作品である点である。とりわけ、注目すべきは1774年以降の傾向であろう。そこで、次に、そこに焦点を当て、他の劇場における公演も視野に収めて、具体的な公演日程の検討を行うが、その前に、1760～78年にロンドン全体で、どのようにオラトリオ公演がなされていたのか、その全体像を確かめておこう。

3-2 1760～78年のロンドンにおけるオラトリオ公演の運営状況

当該期間におけるロンドンのオラトリオ公演の運営者¹⁵⁾を、劇場別¹⁶⁾にまとめたのが表3である。スタンリーの公演と他の公演との関わりが問題になるため、スタンリーの公演と同様に四旬節に11回公演を行ったもの以外はカッコに入れて区別している。

表3 1760～78年のロンドンにおけるオラトリオ公演の運営者

	Drury Lane	Covent Garden	Little Theatre	King's Theatre
1760		Smith and Stanley	(Barbandt)	
1761	(Arne)	Smith and Stanley	(Barbandt)	
1762	Arne	Smith and Stanley		
1763		Smith and Stanley		
1764		Smith and Stanley		
1765		Smith and Stanley		
1766		Smith and Stanley		
1767		Smith and Stanley		
1768		Smith and Stanley	Arnold and Toms	
1769		Smith and Stanley	Arnold and Toms	
1770	Smith and Stanley	Arnold and Toms		(Bach)
1771	Smith and Stanley	Arnold and Toms		(Bach)
1772	Smith and Stanley	Arnold and Toms		
1773	Smith and Stanley	Arne	Arnold and Toms	
1774	Smith and Stanley		Barthélemon	
1775	Stanley			Bach and Abel
1776	Stanley and Linley	Arnold and Hook?		
1777	Stanley and Linley	Arnold		
1778	Stanley and Linley	Hook		

この表から、スタンリーとスミスが公演を受け継いだ最初期の3年を除き、しばらくは彼らが独占的にオラトリオ公演を行っていたが、1768年から毎年、複数の劇場で公演がなされるようになったことが分かる。この1768年以降、スタンリーの公演は、とくに6年連続で公演を行ったサミュエル・アーノルド (Samuel Arnold, 1740-1802) の公演などと競合関係に置かれることになったのである。とくに1773年は3つの劇場で同日、オラトリオが上演されるという事態となっている。

これを踏まえ、次に、1774年を中心に、前後2年間を含めた5年間の上演日程を詳細に検討しよう。

IV 1772~76年のオラトリオ公演におけるプログラムの変化

1772~76年の5年間のロンドンのオラトリオ公演の全日程をまとめたものが表4~8(次ページ以降)である(Zölner 2002: 219-224に基づく)。

まず、ドルリー・レーン劇場におけるスタンリーの公演についてみておくこととしよう。1776年の日程については、すでに本稿2-2で検討したが、ヘンデル作品については、その前の4年間もほぼ同じ演目が並んでいることが分かる。《メサイア》、《ユダス・マカベウス》、《サムソン》、《アレクサンダーの饗宴》、《エイシスとガラテア》が毎年1, 2回ずつ上演され、その他の作品も若干含まれるというプログラムである。特に1772年と1773年については1776年と同様に《メサイア》が最後の2回を締めくくっているが、これは、ヘンデルの生前にさかのぼる慣例である¹⁷⁾。そして、それが初めて踏襲されなかったのが1774年の日程ということになる。

ツェルナーは、この変化が1773年の公演の成功によりもたらされたものと解釈している。「そのような順調な年〔1773年〕の後、したがって、運営者たちはおそらく、彼らの公演により明るい未来が訪れるという希望を抱いたのであろう」(Zölner 2002: 72)。しかしながら、この解釈は特に典拠がなく、純粋な推測にとどまるものである。

実のところ、1773年の成功は、ツェルナーも触れているように、リンリのきょうだい、姉エリザベス (Elizabeth Ann Linley, 1754-1792) と妹メアリーの出演によりもたらされたものである。リンリ家がロンドンのオラトリオ公演に携わったのは、この時が初めてであり、リンリもヴァイオリン協奏曲を演奏している。まだ10代の3人の演奏が評判になったようであり、とりわけエリザベスは国王ジョージ三世夫妻のひいきに与ることともなった。しかし、作家シェリダンの結婚が決まっていたエリザベスは、婚約者の意向もあり、この公演を最後に歌手を引退した。そのようなこともあり、リンリ家は1774年にはオラトリオ公演とは関わっていない¹⁸⁾。

一方、1773年、アーノルドは自身の新作《放蕩息子》を中心とする公演を行った。ツェルナーによれば、新作の初演は成功裏に行われたようである¹⁹⁾。つまり、1773年は3つの劇場が競合し、スタンリーの公演がリンリ家の出演で人気を博した一方で、アーノルドの公演は新作を中心とするプログラムを組み、その新作も好意的に受け入れられた、という状況であった。スタンリーの公演が、翌1774年にはリンリ家に頼れなかった以上、ツェルナーのいう「明るい未来」より、むしろ、危機感を抱いてのプログラムの組み換えとみた方が現実には即しているのではないだろうか。そのあたりについては資料を欠く以上、推測の域を出ないものの、スタンリーの公演における1774年の変化が他の公演との競合関係の中、とりわけアーノルドの公

演に影響されて生じたのは、間違いあるまい。

表 4 1772 年のロンドンの劇場におけるオラトリオ公演の日程

1772	Drury Lane: Smith and Stanley	Covent Garden: Arnold and Toms
3/6	Alexander's Feast Coronation Anthems	Messiah
3/11	L'Allegro and Il Penseroso Utrecht Te Deum	Judas Macchabaeus
3/13	Judas Macchabaeus	Samson
3/18	Acis and Galatea Ode for St Cecilia's Day	Messiah
3/20	Samson	Resurrection (Arnold)
3/25	Alexander's Feast Coronation Anthems	Abimelech (Arnold, revised)
3/27	Joseph and his Brethren	Concerto Spirituale
4/1	Judas Macchabaeus	Messiah
4/3	Acis and Galatea Ode for St Cecilia's Day	Messiah
4/8	Messiah	Concerto Spirituale
4/10	Messiah	Concerto Spirituale

表 5 1773 年のロンドンの劇場におけるオラトリオ公演の日程

1773	Drury Lane: Smith and Stanley	Covent Garden: Arne	Little Theatre: Arnold and Toms
2/26	Judas Macchabaeus	Judith (Arne)	Messiah
3/3	Judas Macchabaeus	Messiah	Concerto Spirituale
3/5	Acis and Galatea Ode for St Cecilia's Day	Messiah	The Prodigal Son (Arnold)
3/10	Alexander's Feast Coronation Anthems	Samson	The Prodigal Son (Arnold)
3/12	L'Allegro and Il Penseroso Dettingen Te Deum	Judas Macchabaeus	The Prodigal Son (Arnold)
3/17	Alexander Balus	Samson	Concerto Spirituale
3/19	Judas Macchabaeus	A Pasticcio	The Prodigal Son (Arnold)
3/24	Acis and Galatea Ode for St Cecilia's Day	A Pasticcio	Resurrection (Arnold)
3/26	Samson	The Death of Abel (Arne)	Messiah
3/31	Messiah	Messiah	The Prodigal Son (Arnold)
4/2	Messiah	Messiah	The Prodigal Son (Arnold)

表 6 1774 年のロンドンの劇場におけるオラトリオ公演の日程

1774	Drury Lane: Smith and Stanley	Little Thatre: Barthélemon
2/18	Judas Macchabaeus	Messiah
2/23	Samson	Samson
2/25	Alexander's Feast Coronation Anthems	Omnipotence (Pasticcio / Arnold)
3/2	Paradise Lost (Smith)	Omnipotence (Pasticcio / Arnold)
3/4	Samson	Omnipotence (Pasticcio / Arnold)
3/9	Judas Macchabaeus	Omnipotence (Pasticcio / Arnold)
3/11	Acis and Galatea	Omnipotence (Pasticcio / Arnold)
3/16	Messiah	Omnipotence (Pasticcio / Arnold)
3/18	Messiah	Messiah
3/23	The Fall of Egypt (Stanley)	Omnipotence (Pasticcio / Arnold)
3/25	The Fall of Egypt (Stanley)	Omnipotence (Pasticcio / Arnold)

表 7 1775 年のロンドンの劇場におけるオラトリオ公演の日程

1775	Drury Lane: Stanley	King's Thatre: Bach and Abel
3/3	Judas Macchabaeus	Deborah
3/8	Samson	Samson
3/10	Judas Macchabaeus	Messiah
3/15	Acis and Galatea Ode for St Cecilia's Day	Acis and Galatea Ode for St Cecilia's Day
3/17	Alexander's Feast Coronation Anthems	Messiah
3/22	L'Allegro and Il Penseroso ed il Moderato Coronation Anthems	Samson
3/24	Messiah	Alexander's Feast Coronation Anthems
3/31	The Fall of Egypt (Stanley)	Judas Macchabaeus
4/5	Messiah	Alexander's Feast Coronation Anthems
4//723	Acis and Galatea Ode for St Cecilia's Day	Judas Macchabaeus
3/25	Messiah	Messiah

表 8 1776 年のロンドンの劇場におけるオラトリオ公演の日程

1776	Drury Lane: Stanley	Covent Garden: Arnold and Hook?
2/23	Acis and Galatea Ode for St Cecilia's Day	Judas Macchabaeus
2/28	Judas Macchabaeus	Omnipotence (Pasticcio / Arnold)
3/1	Alexander's Feast Coronation Anthems	Messiah
3/6	Jephtha	Concerto Spirituale
3/8	Acis and Galatea Ode for St Cecilia's Day	Samson
3/13	L'Allegro and Il Penseroso Chandos Anthem	Messiah
3/15	Alexander's Feast Coronation Anthems	Concerto Spirituale
3/20	A Lyric Ode (Linley) [A Miscellaneous Act]	The Ascension (Hook)
3/22	Samson	Messiah
3/27	Messiah	The Prodigal Son (Arnold)
3/29	Messiah	The Prodigal Son (Arnold)

しかしながら、1774年のスタンリーの公演は首尾よく行かなかったようである。この年を最後にスミスは引退し、スタンリーが1人で運営した翌1775年の公演は、従来のものに戻った。ただし、公演の中に、自身の新作の再演の機会も1回、設けている。そして、続く1776年の公演からはリンリの父トーマスがスタンリーとともに公演の運営を担うようになり、リンリの《シェイクスピア・オード》が、前年のスタンリーの《エジプトの没落》と同じように、ヘンデル作品以外の演目として唯一、公演に組み込まれたのであった。

結び

スタンリーの公演の中でみるならば、《シェイクスピア・オード》は、公演の12年ぶりのオリジナル作品であったスタンリーの《エジプトの没落》に続く新作ということになる。スタンリーは同作が最後のオラトリオとなったから、公演の新たな傾向の中で、リンリは44歳年長の作曲家の創作を引き継いだかたちとなった。その初演が好評を得たことは、当時の批評からうかがい知ることができる²⁰⁾。おそらくそれが、翌年の《モーゼの歌》につながった。

一方、スタンリーと競合したアーノルドの一連の新作の発表も、オリジナル作としては1773年の《放蕩息子》が最後となった。その代わりに、1776年には、ちょうど《シェイクスピア・オード》の初演にぶつけるように、ジェイムズ・フック (James Hook, 1746-1827) の《キリストの昇天》が初演されたが、そちらの評判はよくなかったようである (Zöllner 2002: 179)。

ヘンデルの没後、一時期、1760年代半ばには彼のオラトリオのみがスタンリーの公演で上演

されるという状況となったが、1760年代末から複数の公演が競合する中、ここに名を挙げた新作が生み出されていった。それらのオラトリオの中で、現在、一般にアクセスが可能なのはリンリの作品のみである。作曲家が19歳にしてのものした《シェイクスピア・オード》は、モーツァルトと並び称された彼の早熟の才能をうかがわせる大作として、これまでも注目されてきた。

しかし、この作品は、同時期の他の作品ともども、当時のオラトリオ公演をめぐる状況の変化の中で成立したのものである。ヘンデルの没後、10数年にして、新作オラトリオがやや盛んに作られ始めた中、そのような流れの一翼を担った青年作曲家によって作られ、十分な成果を上げた作品、というのが、本稿が明らかにした《シェイクスピア・オード》の歴史的な位置づけである。

注

- 1) リンリの生涯については、Overbeck 2000a: 28-65 から詳しく知ることができる。また、同 385-387 には、マシュー・クック (Matthew Cooke, c1761-1829) が《シェイクスピア・オード》の筆写譜の余白に書き残した『故トーマス・リンリ・ジュニアの小伝 A Short Account of the Late Mr Thomas Linley, Junior』(1812年。以下『小伝』)の全文も収録されており、これもリンリの生涯にかかわる数少ない源泉資料として参考になる。なお、近年、スコットランドが「リンリ初の伝記」と銘打った著作 (Scotland 2022) を出版しており、記述内容には一部、出典も明記されているものの、フィクションが含まれていることに注意が必要である。
- 2) モーツァルトの伝記情報は様々な文献から容易に得ることができ、また、本稿の主題とも直接には関係しないので、典拠は省略する。
- 3) 『回想録』執筆の約40年前のモーツァルトとの会話を、ケリーがどこまで正確に記憶していたのかは確かめるすべがなく、また、『回想録』には明らかな事実誤認も含まれるので、このモーツァルトの「言葉」も、端的に彼が語ったものと認定することはできない。ただし、それを伝える記述に、ケリー自身の、(広く捉えれば) 同郷の音楽家の早世を惜しむ気持ちを読み取るのは可能であろう。
- 4) リンリの作品の楽譜資料については、Beechey 1970: xviii を参照のこと。
- 5) Beechey 1978: 670f を参照のこと。14曲の内訳は、カンタータ3曲、伴奏付き独唱曲(ソング)6曲、伴奏付き重唱曲(グリー、エレジー)3曲、無伴奏の重唱曲(マドリガル)2曲である。
- 6) クックの『小伝』が記すところによる (Overbeck 2000a: 385-386。クックの『小伝』については注1)を参照されたい)。
- 7) 西洋音楽史において、18世紀後半のイギリスが注目されることが少ないのは、よく指摘されることである。その要因として、モーツァルトやグルック (Christoph Willibald Gluck, 1714-1787)、ハイドン (Joseph Haydn, 1732-1809) のような同時代の、いわゆる「大作曲家」の不在が挙げられよう。本稿は、大きくは、そのような「偏り」を解消しようとする試みとして位置づけることができる。
- 8) ローレンスはリンリと同じくバースの出身で、早くから詩作を行い、後にはオックスフォード大学の民法の教授となった人物である。Beechey 1970: xx や Overbeck 2000a: 118 を参照のこと。
- 9) ピーター・ホールマン監修、ポール・ニコルソン指揮による全曲盤 CD (Helios: H55253) での演奏時間。
- 10) リンリの代表作としての位置づけは、他の作品に先んじて、1970年に批判版が楽譜叢書『ムジカ・ブリタニカ』より出されたという事実からもうかがえる。
- 11) 四旬節は移動祝日である復活祭に先立つ46日間であり、年によって期日が異なる。
- 12) ヘンデルが四旬節の水曜日にオラトリオの公演を行うようになったのは、1743年からのことであり、1753年から日程は11回公演に固定された。なお、ヘンデルによるオラトリオ公

演の変遷については三澤 2007 が参考になる。具体的な上演日程については Stone Jr. 1960-68 参照のこと。

- 13) オラトリオの第 1 部と第 2 部の間などに演奏家が協奏曲等を披露する慣習は、ヘンデルの生前にさかのぼる。ヘンデルや、彼を受け継いだスタンリーはオルガン協奏曲を演奏し、また、年ごとのゲストの演奏家が各種の楽器のための協奏曲を演奏してきた。
- 14) そのためか、例えば、オーヴァーベックは、以上のような公演の状況について触れたのち、《シェイクスピア・オード》については、「この四旬節オラトリオ公演の枠組みの中で、リンリの最も大規模な作品である《シェイクスピア・オード》は 3 月 20 日に初演にいたった」(Overbeck 200a: 57) と記すのみである。
- 15) 表 3 に現れる人物名のうち、本文では言及しないものについて、以下、フルネームと生没年を示す(姓のアルファベット順)。Carl Friedrich Abel: 1723-1787, Thomas Augustine Arne: 1710-1778, Johann Christian Bach: 1735-1782, Charles Barbandt: 1716-?, François-Hippolyte Barthélemon: 1741-1808, Edward Toms: ?-1775。
- 16) 当時のロンドンでは、ドルリー・レーン劇場とコヴェント・ガーデン劇場の 2 つが勅許劇場として、英語の劇作品の上演が許可されていた。また、ハイマーケットにある国王劇場 (King's Theatre) ではもっぱらイタリア語オペラが上演されていた。一方、ハイマーケットの小劇場 (Little Theatre) は、他の 3 劇場の公演期間が 9, 10 月～翌年 6 月であったのに対し、5, 6 月のみ開かれた(四旬節のオラトリオ公演は、例外的な劇場の使用ということになる)。
- 17) 《メサイア》は 1749 年から公演最後の演目となってきており、1755 年から最後の 2 回の上演が定着した。
- 18) とはいえ、1773 年の人気きっかけとなり、トーマス(父)は 1776 年からドルリー・レーン劇場のオラトリオ公演の運営を担うようになった。その経緯については Zölner 2002: 72-74 を参照のこと。
- 19) ツェルナーは、翌年、バルテルモンが公演で《放蕩息子》を再演しようとした経緯を記している(Zölner 2002: 73)。アーノルドがその上演のために大金を要求したため、バルテルモンは断念し、代わりに《万能》を組み込んだ、ということである。
- 20) 当時の批評については Beechey 1970: xxi や Overbeck 2000a: 131-132 を参照のこと。

参考文献

- Beechey, Gwilym. 1965 *Thomas Linley, Junior: his Life, Work and Times*, diss., University of Cambridge
- Beechey, G. 1968, "Thomas Linley, Junior. 1756-1778, in *The Musical Quarterly*, Vol. LIV, No. 1, pp. 74-82.
- Beechey, G. (ed.) 1970 *Thomas Linley, Shakespeare Ode*, (Musica Britannica, Vol. 30), London: Stainer and Bell.
- Beechey, G. (ed.) 1977 *Thomas Linley Anthem: Let God Arise*, (Recent Researches in the Music of the Classical Era, Vol. 7), Madison: A-R Editions, Inc., 1977
- Beechey, G. 1980 "Linley", in Stanly Sadie (ed.), *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*, London, Washington, D.C.: Macmillan Publishers, Vol. 11, pp. 8-11.
- Burney, Charles. 1771, *The Present State of Music in France and Italy*, London.
- Kelly, Michael. 1826 *Reminiscences of Michael Kelly, of the King's Theatre, and Theatre Royal Drury Lane*, London.
- 三澤寿喜 2007 『ヘンデル』(作曲家・人と作品シリーズ), 東京: 音楽之友社。
- Overbeck, Peter. 2000a, *Die Chorwerke von Thomas Linley dem Jüngeren (1756-1778): Analyse, Vergleich, kompositorisches und biographisches Umfeld*, (Hildesheimer Musikwissenschaftliche Arbeiten, Bd. 6), Hildesheim, Zürich, New York: Olms.

- Overbeck, P. (ed.) 2000b Thomas Linley, *The Song of Moses*, (Recent Researches in the Music of the Classical Era, Vol. 58), Madison: A-R Editions, Inc.
- Scotland, Tony. 2022 *Tommasino: The Enigma or the English Mozart*, Shelf Lives.
- Stone Jr., George Winchester. (ed.) 1960-68, *The London stage 1660-1800: a calendar of plays, entertainments & afterpieces, together with casts, box-receipts, and contemporary comment: compiled from the playbills, newspapers and theatrical diaries of the period*, Carbondale: Southern Illinois University Press.
- Zöllner, Eva. 2002 *English Oratorio after Handel: The London Oratorio Series and its Repertory, 1760-1800*, Marburg: Tectum Verlag.

Thomas Linley (1756-1778) and the Performances of Oratorios in London

—A Consideration on the Background of the Composition of *Shakespeare Ode*—

MATSUDA, Satoshi

Abstract

In this paper, I investigated the relationship between Thomas Linley (1756-1778) and the performances of oratorios in London in order to examine the circumstances under which *Shakespeare Ode* was composed by him and premiered at the Theatre Royal Drury Lane in 1776.

【Key words】 Thomas Linley, *Shakespeare Ode*, Oratorio, Mozart, Händel